

「つたえること・つたわるもの」№205

〈いのち〉と〈からだ〉の社会学7

「傾聴の本質」を考える 2——

「ターミナルケア」としての聞き書き。

1. ことばを語る人を「まるごと」聴き取る

サイコセラピスト(心理療法士)・教育学博士(臨床心理)・ライフマネジメント研究所長・近藤裕さんが書いた『愛のストローク療法』(日本教文社、1992年)から、「傾聴の実践」の第一歩でもある『「聞き上手」になるコツ』を読んでみましょう。

相手の立場や、相手が考え、感じていることを理解すれば、共感的な言葉、【愛のストローク】が語れます。と言っても、それが簡単に理解できないのが悩みです。どうしたらできるようになれるのでしょうか。

一つは、聞き上手になることです。相手のことをしっかり聞きとることです。

この【聞く】という、一見、簡単に聞こえる行為も、実はそう簡単ではないんです。まず聞き方にもいくつものレベルがあるということを考えてみましょう。

(1) 聞く——英語で“hear”という。受動的な聞き方。

音声が入ってくるのを認識する。これが基本です。相手の言葉を正確に聞きとるというレベル。

この【聞く】ことも、うっかりするとできないのです。他のことに関心があって聞き損ねることがよくあります。

(2) 聴く——英語で“listen”という。能動的、積極的な聞き方。

音声をしっかりと聞き取ろう、言葉の背後にある相手の意図、状況や心情を理解しようと努めるといった聞き方です。

言葉を聞くだけでなく、このように相手に耳を傾けて聴くことができると、相手に共感

できるようになるのです。これは、【聴く】意志を持って努力すればできるようになれるでしょう。それには、ただ耳で聞くだけでなく、目で聴き(相手の表情を見ながら—ときには、黙って相手を観察することも大切)、こころで聴き(相手の心情を感じとる)、頭で聴き(見て、聞いて、感じたことを理解する)、からだで聴き(からだ全体を相手に向けて)、気をこめて聴く(本気で)ことが大切です。

(3) 訊く——英語で“ask”という。聞いた相手の言葉の意味、感じとった心情、察した意図や状況の理解が正しいかどうかを相手に尋ね、確かめる。事実か、自分の推論か、かつてな断定をしているのかどうかなどを確かめるために訊く。

この【訊く】ことは、思い込みによる誤解を防ぐのに必要です。私たちの誤解、曲解は思い込みに基づくことが多いのです。また、お互いの気持ちが通じない

ということも、この思い込みが原因となっていることが多いのです。

このように、【きく】ということは、単に言葉が耳に入ることだけではなく、聞いた言葉が出てくる状況や、その言葉にもなって表現される(ときには抑えられている)感情を聴くこと、つまり、傾聴することによって、言葉を語る人全体を聴き取ることなのです。そして、そのように【きく】とき、その相手をより正確に理解することが可能になるのです。

(『愛のストローク療法』から、ポイントを要約)

2. ターミナルケアとしての聞き書き。

六車(むぐるま)由実さんの著書には、『驚きの

介護民俗学』(医学書院、2012年)がありますが、究極の「傾聴」ともいうべき「聞き書き」について触れた原山の連載コラムを二つ、「編集長の目」№171(『トランネット通信』2013年11月)と「Book Therapy(ブックセラピー)」no.24(『出版ニュース』2013年12月中旬号)を紹介します。

作家・遠藤周作さんが提唱した「心あたたかな医療」運動のひとつ、患者のベッドサイドでの傾聴をめざして始まった遠藤ボランティアグループ(病院ボランティア)活動三十周年記念の講演会が、2013年11月17日(日)、東京・六本木の国際文化会館で開催された。演題は「ターミナルケアとしての聞き書き——介護民俗学の実践から」というものである。

講師は、数年前、思うところあって東北芸術工科大学准教授の職を辞し、介護士の資格を取り、静岡県内の特別養護老人ホームの職員を経て、現在はデイサービス管理者兼生活相談員であり、民俗学の研究者でもある六車由美さん。

おもに町や村の古老から、民間の伝承(日常生活文化の歴史)を聴き取るフィールドワークをつづけてきた六車さんは、介護の世界に身を転じたいまも、利用者のお年寄りから聞き書きを行っている。

今回の講演をお願いしたのは、私が当時、代表をつとめていた遠藤ボランティアグループの活動メンバーが、病院や介護施設でのベッドサイドにおける傾聴を考える上で、介護施設の利用者の聞き書きをつづける六車さんの介護民俗学的思考から、病院ボランティア活動に不足している、あるいは気づかずにいる「何か」がわかるのではないかと思ったからである。

『驚きの介護民俗学』(六車由実著、医学書院、2012年)を読みながら、六車ワールド(介護民俗学)の一端をのぞいてみよう。

◆「ただ生きているのは地獄同然だ」

同書冒頭に、「こんな年寄りになって、ただ生きているのは地獄同然だ」という大正五年生まれの利用者、Yさんの言葉が出くる。介護施設で生活するお年寄りがよく口にすてる言葉のひとつだが、何の役にも立たず、他人の世話になっているばかりじゃ生きている意味がない、だから地獄だ、というYさんの聞き書きは、次のようなものだった。

俺たちは自分のためだけに生きてきたわけじゃない。税金もしっかり払ってきた。それは、自分の生活だけがよくなればいいからではなく、みんなでこの国をつくっていかうと思っていたからだ。国をつくるのは政治家じゃなくて、国民なんだ。なのに今の人たちは、自分の幸せしか考えていない。税金が増えれば文句を言う。自分の資産が減るから。でも、こんな俺たちのような考え方も生き方も今はもう古いんだ。俺たちが何を言ったって、小さなミミズがによる体にくねらせて這いまわっているだけにすぎない。だから、何も言わない。生きている意味がない。

(『驚きの介護民俗学』「生き地獄」13ページ)

先週、武蔵野大学の授業で「厚生年金の支給開始年齢は、現在の60歳から65歳に5年繰り下げられる。皆さん世代は支給金額も減額されるかもしれない」と話したところ、出席カードに「いまの高齢者世代はずるい。バブル期にいい思いをして、年金も全額もらえて……」「私たちが現役時代にとられた年金は、絶対に払ってもらいたい」などのコメントがあった。

来月、二十七回忌(没年68歳)を迎える私の父、大正8年生まれ。職業軍人(陸軍主計大尉)だっ

た父は、戦後いくつかの職業を転々とし、「これからの日本を救うのは経済だ」と言いながら、晩年は食品会社の役員として働いていた。まさに、日本の高度経済成長を支えた企業戦士のひとりである。いまにして思えば、その父とはYさんの聞き書きのような話をしたことがない。私が出版社に入ったとき、粋がって「平凡なサラリーマンだけにはなりたくない」と言ったら、「何を言うか！平凡はそんな簡単なもんじゃない」と叱られた。

私の母は昭和2年生まれ。戦時中、軍人だった父について平壤に行き、敗戦直前に福岡に戻るといいます。昔はよく、平壤のころのオンドルの話をしていました。

「ただ生きているのは地獄同然だ」にも、「平凡はそんな簡単なもんじゃない」にも、さきの戦争を経験したYさんと父の「昭和のエートス（倫理的な心的態度）」が感じられる。

やはり、六車さんの聞き書きに出てくる大正15年生まれのSさんは、「私は朝鮮の平壤で生まれたの。チョウセンサラミ（朝鮮人）、チョウセンサラミってよく言われたの」が口癖だった。

朝鮮の平壤というところはとりわけひどいところだったの。京城とは大違いだったよ。寒くてね、たまらなかった。朝鮮にはオンドルっていうのがあってね。竈（かまど）でね、火をたくでしょ、そうするとずっと下のほうまで温かいのが広がるのよ。台所の向こうには六畳かな、八畳ぐらいだったかな、部屋があってね、そこで家族みんなで寝たのよ。下からぼかぼか温かくてね。

（『驚きの介護民俗学』35ページ）

はからずも、YさんとSさんの聞き書きは、私の両親の実人生と重なっている。また、さきに紹介した大学生のコメントもまた、身勝手な言い分

だと切って捨てるわけにはいかない。その言葉は、間違いなく、昭和20年代前半生まれの私たち世代に向けられている。

六車さんは、【介護や福祉の世界でのコミュニケーション論では、語られる言葉による言語的コミュニケーションに比べて、態度や表情、身振りといった言葉以外を情報としてやりとりをする非言語的コミュニケーションが過剰に重視されがちではないか】という疑問を投げかけている。

また、一般的な意味での「傾聴」が、【相手の言葉をそのまま繰り返して反射する＝単純な反射（おうむ返し）、相手の言葉をワーカーの言葉で言い換えて反射する＝言い換え、相手が語ったことを要約して反射する＝要約、相手の語ったことを明確にして示す＝明確化といった方法】によって相手を安心させたり、勇気づけたりすることで、【語られる言葉が示す内容よりも、「言葉のなかに隠された利用者の気持ち、思い、心の動き」を「察する」ことを目的としていると言えるだろう】ことから、むしろ、【相手の言葉そのものを聞き逃さずに、書きとめることに徹する。それによって相手の生活や文化を理解するという民俗学における聞き書きの手法】というものが、介護の現場においても有効ではないかと書いている。

究極のノンフィクションとは、同書に収められた「聞き書き」たちのことである。

（『編集長の目』№171）

3. 思い出の記、思い出の味の再現。

そのあと、『出版ニュース』誌に連載していた『ブックセラピー』№24（2013年12月中旬号）でも、同じトピック（話題）をとり上げました。

先月、私が代表を務める遠藤ボランティアグループの活動三十周年記念講演会に、現役のデ

イサービス施設管理者であり、いま話題の民俗研究者・六車由実さんをお招きした。演題は『人生のターミナルケアとしての聞き書き——介護民俗学の実践から』である。

大学院で民俗学を専攻し、2003年に著書『神、人を食う——人身御供の民俗学』（新曜社、2003）で第二五回サントリー学芸賞を受賞した六車さんは、突然、2008年に大学准教授の職を辞し、翌年、特別養護老人ホームの職員に身を転じた。いまはデイサービスの施設管理者兼生活相談員として介護福祉の現場で働く六車さんは、かつて地域の古老を訪問して行った「聞き書き」による民俗調査のフィールドを、年配利用者が多い介護施設での「聞き書き」につなげながら、その体験を『驚きの介護民俗学』にまとめ、介護民俗学という新しい分野を提唱した。

私たちの病院ボランティア活動は、傾聴——遠藤周作さんいわく「病人の愚痴を聞く」ボランティア——をめざすグループだが、患者の話聞くことの意味を、「聞き書き」というフィールドワークから学びたいと思ったのである。

今回の講演には、ふたつの驚きがあった。

ひとつは、「思い出の記」という表現である。

それは単なる聞き書き（インタビュー）ではなく、この日の演題でもある「人生のターミナルケアとしての聞き書き」を端的に表した言葉だ。高齢者をケアする介護現場では、ほとんどの利用者がやがて訪れるであろう、自らの死を意識している。

「自分の人生について、このまま何も語らずに死んでいくのはもったいない」

「孫たちに、自分の生きてきた証を残したい」

これらの言葉は、自分が死んだあとに残された人々に向けられているだけでなく、むしろそれ以上に、やがてこの世に別れを告げるはずの自分自身に向けられた思いでもある。昭和18

年に亡くなった私の祖父は、「肉體よ仮りの宿りは今日限り 一切空にかへれ 左（さ）よなら」という辞世の句を残した。

最後の「さよなら」は、ほかの誰よりもまさにこの世を去らんとする自分に対して、現世の肉体をまとった自分に対して、もう一人の時空を超えた存在としての自分が語りかけている。

その観点で「思い出の記」を眺めてみると、「聞き書き」にまとめられた思い出の数々は、それを語らずにはおれなかった利用者が、自分自身に向けて発した「さよなら」のメッセージではないだろうか。

もうひとつの驚きは、デイサービスの現場で記録された「思い出の味の再現」というビデオ映像だった。しばしばデイサービスなどでは、地域の郷土料理などを利用者とスタッフがいっしょに作って食べる行事があるのだが、そこに利用者個人の「思い出の味」を取り入れ、これも介護民俗学（聞き書きワーク）の実践として位置づけたのである。

そのきっかけは、ドイツの末期がんホスピスでの試みを紹介した『人生最後の食事』（デルテ・シッパー著、川岸史訳、シンコー・ミュージック・エンターテイメント、2011年）という本との出会だったという。

この本で「人生最後の食事」を再現するのは、患者自身ではなくホスピス専属のシェフだが、このヒントを利用者個人の「思い出の味」に置き換えて、そう遠くない自らの死と向き合って暮らす「最後の食事」を、ほかの利用者やスタッフと共有するこのアイディアには、高齢者の孤独を、思い出の共感につなげる大きな力がある。

傾聴の本質は、「聞き書き」のなかにある。

（「Book Therapy」no.24）

